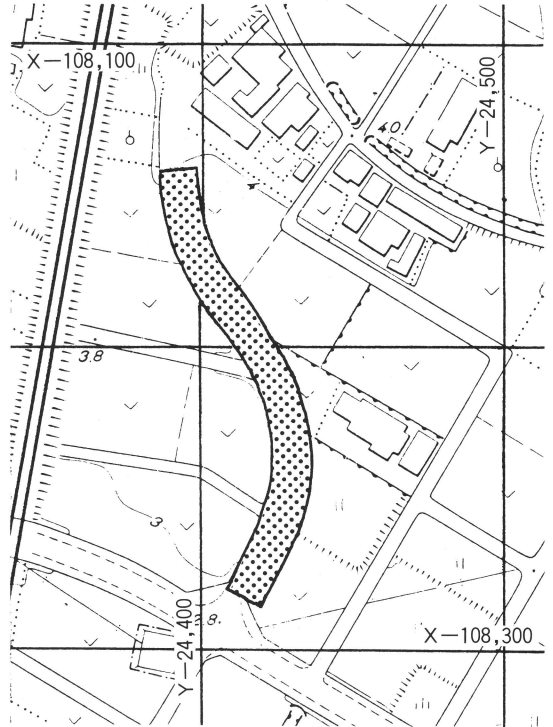


まつ ぎき
松 崎 貝 塚 遺 跡

調査の経過

松崎貝塚遺跡の所在する知多半島基部の伊勢湾岸には、半島内でも有数の海岸平地が展開している。この海岸平地には、内陸の海蝕崖から西へ第1・第2及び第3砂堆に分類される砂堆列が海岸線に並行している。本遺跡はこの内最大規模の第3砂堆北端に立地している。本遺跡の発掘調査は、昭和51年に東海市教育委員会により、西外縁部にあたる旧海岸線付近を中心に実施された。その結果、古墳時代後期から平安時代末に及ぶ古代製塩遺跡であることが明確化した。今回の調査は、遺跡のほぼ中央を縦断する形で調査区を設定し実施した。



第1図 調査区位置図 (1/2500)

調査の概要

基盤（黄灰色細砂）は調査区の北からほぼ中央までは標高2.5mの水平面を保ち、それ以南は漸次降下し、南端では1mを測る。北半部では平均50cmの遺物包含層の堆積が認められ、断面観察から数次にわたる製塩に関連した「産業廃棄物層」であることが看取された。遺物の大半は破碎した製塩土器（知多4・5類）である。また、調査区ほぼ中央で、基盤直上に形成された貝塚（層）が検出され、古墳時代後期の須恵器・土師器、製塩土器（知多1～3類）、鉄製品および獣骨など一括性の高い遺物が出土した。南半部は異時期の遺物の混在、青灰色粘土・粗砂の堆積等から古代の汀線付近と推定され、明確な遺構は認められない。

まとめ

古代土器製塩に関しては、その遺跡立地の性格上、得られる情報が少なく、生産過程は未だ明確でない。また、海浜集落の空間利用、社会体制内での位置付け、流通経路等、残された課題は多い。「知多」に限れば、土器編年の再検討、地域間の交流の問題等が挙げられる。「知多」と中央を結ぶ「塩の道」を多角的に捉え、辿り直す時期に来ている。

(福岡晃彦)